

(様式第1号)

令和2年度第1回 芦屋市立図書館協議会 会議録

日 時	令和2年10月13日(火) 15時～16時20分
場 所	図書館本館2階集会室
出席者	委員長 笹倉 剛 委員長代理 浦山 佳代 委員 岩井 恵子 委員 枝元 益祐 委員 熊本 潤子 委員 多田 直弘 委員 藤本 史子 委員 松川 圭子 事務局 社会教育部長：田中（公務のため欠席） 館長：丸尾 管理係長：山内 利用サービス係長：宮田 管理係：石田
欠席者	なし
会議の公開	■ 公開
傍聴者数	0人

1 会議次第

- ① 新委員の委嘱および任命について（委嘱状等の交付）
- ② 令和2年度予算等について
- ③ その他

2 提出資料

令和2年度第1回芦屋市立図書館協議会 資料

3 審議経過

協議会開会

図書館協議会委員委嘱・任命

各委員自己紹介

(笹倉委員長)

昨年度まで委員長代理をされていた山田委員が辞任されたため、委員長代理を決めたいと思います。私が指名することにご異議はございませんか。

(「異議なし」の声起こる。)

(笹倉委員長)

それでは委員長代理は浦山委員にお願いします。浦山委員長代理、ご挨拶をお願いします。

浦山委員長代理あいさつ

(笹倉委員長)

本日、協議会の傍聴をされる方はおられますか。

(丸尾館長)

今のところ傍聴者はありませんが、会の途中から傍聴される場合は諮らせていただきます。

(笹倉委員長)

続きまして2. 令和2年度予算等について議題としたいと思います。事務局、説明をお願いします。

事務局による説明

(笹倉委員長)

ご質疑・ご意見はございませんか。

(松川委員)

「こどもおはなしの会」について、お尋ねします。「こどもおはなしの会」は、従来、本館1階「おはなしのへや」で開催していたのですが、現在は、新型コロナウイルス感染症対策のため、2階集会室にて開催しています。しかし、おはな

しのへやで行う「こどもおはなしの会」は、やはり子どもたちにとっては特別なようで、「あの部屋はいつ開くの?」、「今日はおはなしのへやではないの?」と聞かれます。

あらためて、環境の大切さを感じているところです。おはなしのへやの使用の見通しは、どのようになっているのでしょうか。

(丸尾館長)

図書館は令和2年3月12日から5月31日まで、新型コロナウイルス感染症対策のため、臨時休館をしていました。現在、座席数等のレイアウトは、6月の再開当時とほぼ同様の状況になっております。利用者間の距離等については、1メートル以上のソーシャルディスタンスを保つため、現在の座席状況を維持する必要があると考えています。また、行事の定員についても、従来の定員の100%以内としており、万全を期す必要があることから、当面は現在の環境で開催したいと考えております。

(笹倉委員長)

その他、ご意見はございませんか。

(笹倉委員長)

ないようでしたら、3. その他 に移ります。せっかくの機会ですので、図書館運営に関して何かご意見はございませんか。

(松川委員)

例年、小学3年生を対象に図書館見学を実施していましたが、コロナ禍において中止になって、残念です。図書館見学をした子どもたちが、図書館のおはなし会に来てくれることで、学校とのつながりができていたのですが、図書館を知らない学年が増えてくると、高学年になっても利用しないのではないのかと危惧しています。コロナ禍で、どうすることも出来ない状況とは思いますが、いつか、子どもたちが安心して図書館を利用できる環境を整えたいと思っています。

(丸尾館長)

行事については、感染防止の観点から実施できていないものがありまして、その中のひとつに、小学3年生の図書館見学があります。この見学では、図書カードの作り方の説明や、おはなしを聞いてもらうなど、よい形で図書館の利用促進ができていました。今年度は、その代わりに、学校教育課から提案と協力依頼があつて、図書館見学の体験動画を作成し、児童がインターネット上で閲覧できる

ようにしました。こうした新しい試みを通して、動画でできること、できないことがあると感じました。今後は、コロナ禍において、そういった「できること」「できないこと」を仕分けていく必要があると強く感じました。こうした課題も考慮しながら、より良い方法を検討していきたいと思えます。

(浦山委員)

図書館見学が中止になったのは、本当に残念です。暗いお部屋でおはなしを聞くのは子どもたちにとっても初めての体験で、子どもたちからも好評です。どんな形で出来るのか、わかりませんが、有意義なものですので、ぜひ検討していただきたいと思えます。

(笹倉委員長)

コロナ禍で、今は無理だと思うのですが、事例を紹介します。オーストラリアやカナダで行われていることですが、図書館が学校からの見学者を迎え入れる際、市の教育委員会の図書館担当が一日がかりで、利用者教育を行っています。これは、将来、図書館のファンをつくるために大切なことです。また、ベルリンの図書館で行われているイベントに、図書館ナイトデーというものがあり、図書館で利用者が泊まり込み、怖い話を話すなどのイベントを行っています。このように、子どもたちにとって、図書館が身近な存在になるような企画があると楽しいと思えますし、子どもたちは芦屋の図書館を大切にすることではないかと思えます。

(多田委員)

かつて、「本を読んでいる子は、間違いなく東大に行ける。」という考えが、一時的にテレビなどのマスメディアを通じて話題になりました。一例ですが、このようにマスメディアを利用した宣伝も大事ではないでしょうか。また、私が営業職として勤務していた頃、仕事には浅く広い知識が必要だとわかって、朝から晩まで図書館を利用しました。そのうち、人と会話するのが苦痛でなくなってきました。因果関係で行くと、損得で動いているのかと言われそうですが、損得は意外とモチベーションになります。

(枝元委員)

笹倉委員長がお話された夜の図書館ですが、私は夜の水族館に泊まるというイベントについて、メディアを通じて聞いたことがあります。夜行性動物の生態や水族館のバックヤードを、水族館に泊まることによって知ることができますので、図書館バージョンも実施は難しいとは思いますが、面白

そうだなと思いました。多田委員の「本を読めば賢くなる」というのは、間違いなく因果関係はあるはずです。認識力や思考力、空間認識を深めるなどの効果があり、「本を読めば賢くなる」という因果関係は、本を読むことが好きな人にとっては、納得できる考え方だと思います。しかし、本を全く読まない人には、このような遠因としての因果関係があることは、なかなか理解しにくいのではないかと考えます。因果関係として、本を読むと知識が深まるということは確かにあるのですが、本をよく読む子どもたちの家庭環境というのは、本をよく読むから学力が上がるのではなく、家庭環境の中で学習習慣が育っていくプロセスの中で上がっている。そうでなければ、偏差値が低い子に本を読ませて、スコアが上がらないと辻褃が合わないことになります。

PISA（国際学力調査）の学力問題で、10年くらい前に話題になりましたが、学力の高い人と低い人を比較すると、学力の高い人たちは朝ご飯を食べているので、朝ご飯を食べましょうという話になりました。これも似た構造になりますが、朝ご飯を食べている生活リズムの家庭環境の子が、相対関係として学力が高いということなのです。にもかかわらず、教育委員会から学生に対して朝食を食べているかの調査や朝食を食べようよう啓蒙するようという指示が出たりしますので、本を読めば学力が上がるのは間違いありませんが、そこだけ切り取って、朝ご飯と同じ末路になるとよくないなと思います。

（多田委員）

ひとつの意見には、いろいろな側面があると思います。テレビなどのマスメディアは、国民にわかりやすく伝えているのであって、限られた時間では全ての内容を伝えることはできません。私は、とにかく本を読んでほしい、図書館に足を運んで欲しいという意味でお話させていただきました。

（笹倉委員長）

せっかく、読書の話になりましたので、コロナ禍における個人の読書をどう進めていくのか、赤ちゃんから高齢者にいたるまで、幅広く読書を広めていくにはどのようにしたら良いのか、最後に皆さんの忌憚のない自由なご意見をお願いしたいと思います。

（枝元委員）

読書には多様な捉え方が必要かと思います。平たくいうと、娯楽のため、リラックスのための読書もあれば、思想を深めていくための読書があります。具体的に言うと、娯楽のためであるならブラウジング、いわゆる読みものを充実していくことになるでしょうし、思考をまとめるとなると、純文学やレファレンスツ

ルを充実させていくということになるでしょう。図書館としては、あらゆる情報ニーズに対応するために資料を収集するということになるかと思います。まず、利用者がどんな資料を求めているのか、どんなスタイルで利用されているのかを把握することから始めることとなります。芦屋市民の図書館利用の傾向や特徴はどのようなものなのでしょうか。

(丸尾館長)

図書館の利用実態調査や令和2年2月に実施した市民モニターアンケートの結果では、娯楽に関する資料を充実させて欲しいという意見が多かったのですが、一方では、調査研究を目的に利用されている方もおられますので、どちらの要望にも応えられるよう、役立つ図書館として運営していきたいと考えています。

(多田委員)

図書館ではどういう本がよく読まれているかなどのランキングを出すのも面白いと思います。

(藤本委員)

論点からはずれてしまうかもしれませんが、車でないと来られないような遠方に住んでいる方も図書館を利用されているのでしょうか。

(丸尾館長)

利用の傾向としては、やはり施設から近い地域の方の利用が多く、遠くなると、少なくなります。当市の図書館施設は南部に偏っておりまして、北部の地域には施設がないこと、また、コロナ禍および災害時におけるサービスの継続についても課題だと考えています。

(藤本委員)

以前、テレビで、移動図書館が定期的に巡回して、絵本や子どもが喜ぶような本を搭載しているのを観たのですが、そのようなものがあれば、子どもさんも利用しやすいと思います。また、学校の図書館から利用してもらい、例えば、先生がお気に入りの本を薦めてくれるとか、また、うちの子どもは、好きな本は、同じような内容の本をとことん読んで、親でも知らないような知識を得ていたので、そういうきっかけがあればいいなと思います。

(熊本委員)

最近、残念に思っていることが、ふたつあります。ひとつは中学への絵本の読み聞かせの活動が中止になったことです。もうひとつは、私の所属している「あし笛」(朗読ボランティア団体)が図書館から大人のための朗読会の企画の話をいただいて、すごく楽しみにしていたのですが、コロナ禍で今のところ、その話もないことです。委員の皆さんと、「あし笛」会員の私の立場からでは、少し意見が違おうと思っていることがあります。皆さんは、どうやって本を読んでもらえるかということについて考えておられますが、私たちは目の見えない方、自分で本を読むことができない方のために、どのような対応をするか、その方法について考えています。目の見えない方たちにはサピエ図書館があり、どなたでも、どんな本でも読むことができますが、障がいはなくとも、お年を召されて本を読むのが難しい方もおられます。動画サイト「You Tube」では本の読み聞かせなどは、配信できません。情報を提供するために、私たちに何かできることはないかと考えています。

(笹倉委員長)

私の調査では、読み聞かせを体験した子どもたちの8割程度は、読み聞かせしてもらった本を読み返しているということがわかりました。いかに読み聞かせが子どもと本を結びつけるのに大事かということですね。

(岩井委員)

私自身の経験ですが、以前、小学生への読み聞かせに参加する機会がありました。中でも、高学年に対しては、どの本が適切なのか不安でしたが、とてもよく聞いてもらえて嬉しかったです。

また、子どもは本を読みたいと思っても、どんな本があるかを知りません。ある先生は、教室に自分が好きな、いろんな種類の本を並べてくれました。こういった取組は、子どもたちにとって、興味のある本を見つけるよい機会だと思いました。

(浦山委員)

私の小さい時は移動図書館があつて、楽しみでした。図書館に行けない子どもたちに対しては、図書館が外向くことも考えられます。実現は難しいと思いますが、図書館を巡るバスを運行するなどでできれば良いと思います。

(多田委員)

私は『子どもの科学』等の子ども向けの雑誌をよく読みますが、これがとても

面白いのです。図書館にある子どもの向けの雑誌は、大人向けのものと比べ、少ないと思います。子ども向けの雑誌も探せば、もっとあるのではないのでしょうか。

(笹倉委員長)

口承文化と識字文化のうち、日本は口承文化が非常に弱いと言われています。読み聞かせなどの読書活動をされているかと思いますが、口承文化は就学前の子どもでも楽しむことができます。以前、図書館長を務めていた私の知人は、子どもから高齢者までの幅広い年齢層の市民に図書館マル秘活用術といったものを依頼して書いてもらい、『うっとこの図書館』という冊子にして、毎年発行していました。また、2～3年前に出雲市を訪れた際、出雲の小学校は読書活動が熱心だということで、見学させていただいたら、「家読(うちどく)」という、家族と一緒に20分程度本を読もうという活動があるのですが、その活動について廊下に掲示されていました。この家読については、各市で教育委員会が関わり、全国でも、かなり取り組まれています。椋鳩十が提唱した、朝の20分読書運動のような波を起せないかなと思います。それから、障がいのある方へのサービスやコロナ禍のサービスにおいて、図書館として電子書籍を充実させると、大活字本のように文字拡大なども可能です。著作権の問題等ありますが、そういった多様な楽しみ方ができるようになるといいですね。

(枝元委員)

出雲の学校図書館は、全国にも有名なお話ですが、ひとつ似たような例を挙げますと、沖縄の学校図書館では、読書活動の推進として、例えば、野球部のキャプテンがお薦め本を紹介するのですが、そこには書評以外に、どんな人に読んでもらいたいのかという熱いメッセージが添えられているのです。また、このお薦め本の紹介は、次はバスケット部のキャプテンへ、という指名制になっています。また、初めに校長先生が、それから数学の先生が本を紹介して、「あの先生が良いというのなら読んでみようか」、「あの野球部のキャプテンが薦めるのなら読んでみようか」といった、誰々の紹介という形で広がって、発展していく。同じ本の読み解き方が色々とあって、発展・比較することで本の世界が広がっていくことを笹倉委員長のお話を聞いて、思い出しました。

(多田委員)

私の利用方法を紹介します。私は、午後1時頃に図書館に行くのですが、それは何故かという、返却されて本棚に戻される前の本の中に面白いものがないかなという考えからです。さきほどのお話を伺うと、読んだ人のメッセージなどがあると良いかもしれませんね。図書館の蔵書37万冊の中から、なかなか本は

選べません。返却された本の中から選ぶのが一番手っ取り早くて、私の場合、10冊に1冊くらいは、本当に価値があったという本に出会えます。

(丸尾館長)

非来館型のサービスと、さきほどのお話にもあったように、来館して実際に書架を廻って、本と偶然の出会いをしていただけるような来館型サービスと、どちらについても拡充していく必要があると考えています。また、障がいのある方、図書館から遠方に住んでいる方に対するサービス向上について、今後も取り組んでまいります。

(笹倉委員長)

それでは、これもちまして閉会とします。ありがとうございました。

以 上